

日本語学習者の敬語コミュニケーション観の

変容過程に関する事例研究

徳間 晴美

【キーワード】 待遇コミュニケーション 敬語コミュニケーション観
意識化 変容過程 敬語

1. はじめに

敬語¹の基本的な考え方や具体的な使い方を示した「敬語の指針」(文化審議会 2007:5)では、敬語は、内容を表現するだけでなく、相手や周囲の人やその場の状況についての自らの気持ちを表現するものであり、主体的な選択や判断に基づく自己表現として考えるべきだとされている。つまり、敬語を用いたコミュニケーションにおいては、常にコミュニケーション主体の主体的な選択や判断が必須であり、それによって自己表現が実現するということができる。しかしながら、この重要な機能を持つ敬語に関しては、日本語学習者の多くが苦手意識を持ち、敬語の使用を避けようとすることも少なくない。敬語を扱う教育において、学習者が十分に自己表現できるようになることを目指すならば、それぞれの学習者がどのようなコミュニケーションを望んでいるのか、学習者本人が認識することに加え、教師も理解する必要があると考える。

そこで本稿では、学習者一人ひとりの主体的な選択や判断の土台にある、「敬語コミュニケーション観」に着目し、その意識化を目指した授業実践を通して、学習者の敬語コミュニケーション観の変容過程を分析し、意識化の意義について考察する。

2. 敬語コミュニケーション観の位置づけ

「敬語コミュニケーション」とは、相手や話題の人物に対する尊重や不満、苦情などを幅広く扱う「待遇コミュニケーション」(蒲谷 2003)のうち、特に敬語に関わるコミュニケーションを指す。待遇コミュニケーションの理論的枠組みでは、コミュニケーションをする際、「人間関係、場、意識、内容、形式」の5つの要素を適切に「連動」させることが重要であるとされ、中でも場面(人間関係と場の総称)に対するコミュニケーション主体の認識を重視する。これら5つの要素を実際のコミ

コミュニケーションにおいて意図したとおりに「連動」させることは、待遇表現形式の複雑さもあり、学習者には難しさを感じさせるものである。

「連動」の仕方で重要なのは、学習者が、自身の目指すコミュニケーションのイメージに、より近いコミュニケーションを実現することであるが、その選択や判断の基準は、母語や母文化、性格といった、学習者が備えている性質を軸としながら、個々の経験から形成されるため、一人ひとり異なるものである。徳間（2009）は、待遇コミュニケーションの5つの要素のうち何を重視するか、あるいはどのようなコミュニケーションをよりよいと考えるかなど、コミュニケーション主体の待遇コミュニケーションに関する認識のことを「待遇コミュニケーション観」と呼び、「連動」の仕方を司るものとして位置付けている。

そこで本稿では、待遇コミュニケーション観の中でも、学習者の自己表現と特に深く関わる敬語の用い方に関しても、学習者個々の認識があるという考えの下、「コミュニケーション主体の敬語コミュニケーションに関する認識」を、「敬語コミュニケーション観」と規定し、分析対象とする。

分析にあたっては、筆者が学習者に敬語コミュニケーション観の意識化²を促すことを目指して行った、敬語コミュニケーション科目のクラスの学習者を取り上げ、1学期間の変容過程を見ていく。敬語コミュニケーション観を捉える方法としては、筆者が前学期の授業実践を通して重要だと考えた以下の6つの観点を設けた。

観点①：敬語の**イメージ**

観点②：敬語の**意味や役割、機能**

観点③：敬語使用の**目標レベルとその理由**

観点④：敬語コミュニケーションにおける**自信及び不安**

観点⑤：自分の敬語コミュニケーションに対する**満足度とその理由**

観点⑥：自信を持ち、満足できる敬語コミュニケーションに対する**期待**

この観点に基づいて学習者の敬語コミュニケーション観を捉え、また、その変容に関わったと考えられる意識及び認識も、後述のデータに基づき分析していく。なお、学習者の敬語コミュニケーション観の変容には、授業実践内容だけでなく、他の学習者による影響も少なくないが、本研究ではその影響の重要性も認めた上で、考察では主に、授業実践内容との関連を考えていく。

3. 研究概要

3.1. 実践クラスについて

授業実践を行ったのは、国内の私立大学にある日本語教育機関開講の

敬語コミュニケーション科目の中上級³クラス（1コマ 90 分で週 1 回、全 15 週）である。学習者は 17 人（男 7・女 10）で、学部・大学院の正規留学生、別科生などであった。

このクラスで掲げた目標は、次の 3 つである。第 1 に、待遇コミュニケーションにおいて重要な 5 つの要素の「連動」の重要性を理解した上で、敬語コミュニケーションを捉える観点や概念を理解すること。特に、敬語コミュニケーションで重要となる上下関係や親疎関係、立場・役割、場の改まり度など、場面を捉える観点を理解し、常に意識できるようになることを目指した。第 2 に、「おっしゃる」などのそれぞれの敬語がどのような敬語的性質⁴を持っているかを理解することで、表したい気持ちに合う敬語の選択ができる力を身につけることを目指した。そして、第 3 に、自分はどのような敬語コミュニケーションをしたいと思うのか、振り返りやクラスメートとのやりとりを通して、自分の敬語コミュニケーション観を自覚的に認識できるようになること、すなわち「私の敬語コミュニケーション」に対する意識を深めることである。

3. 2. 実践内容と分析データ

授業実践は、筆者が組み立てた進行スケジュールを基本としつつ、学習者の様子を見ながら、時間のかけ方や内容を調整して進めていった。主な内容は、次のとおりである。

初回の授業（2 週目）では、今まで自分が経験してきた敬語コミュニケーションを振り返らせた上で、待遇コミュニケーションの理論的枠組みで示されている 5 つの要素を確認した。3 週目はその着眼点を生かして、スキット⁵や実際に学習者が経験した場面を題材にし、場面の捉え方について考える活動を行なった。その後、4 週目から 9 週目にかけては、敬語体系の学習とグループ活動を並行して進めていった。敬語体系の学習では、場面を捉える重要性に意識を向けさせた場面練習⁶を行い、7 週目と 9 週目には前週に録音⁷した学習者の発話をスクリプトにして、より客観的に自分の敬語コミュニケーションを見つめられる機会を取り入れた。グループ活動では、今後の自身の敬語コミュニケーションに役立つことをテーマ決めの条件とし、関心の近い 2～4 人でグループを作って、日本人に対するインタビュー及びクラスでの発表を行った。なお、7 週目には、実際に全員が経験する「クラスでの発表」という場面について 5 つの要素を確認し、その上で、自分はどのような敬語コミュニケーションをしたいと思うかを意識させた。この際、発表や質疑応答で使える敬語表現も確認した。そして、10 週目には 3 つのグループが、11 週目には 2 つのグループが、それぞれグループ発表を行った。翌 12

週目は、グループ発表の質疑応答で挙げた話題についてディスカッション⁸をし、各自の認識の意識化を図った。13 週目と 14 週目⁹は、インタビューに協力してくれた人にお礼のメールを送るという想定の下、敬語体系の復習も兼ねて、メールによる敬語コミュニケーションの練習をした。

次に、分析するデータについて説明する。本研究では、上記の内容で行った実践クラスの学習者の 1 人であるハンナ¹⁰（仮名）の事例を分析する。ハンナは韓国出身の 22 歳の女子学生で、日本語を母国で 1 年間学んでから、学部留学生として、受講開始の 1 か月前に来日したばかりであった。敬語については、日本語能力試験の受験のために学んだことがあるが、来日時は友達ことばに慣れていて、敬語はほとんど使わない状態であったという。

本研究で扱う具体的なデータは、授業実践の中で得られたもので、「内省データ」「産出データ」「振り返りデータ」の 3 種類がある。「内省データ」は、学習者の敬語コミュニケーション観を捉えるための中心的なデータであり、4 週おき¹¹に一度、計 3 回、内省シート（4 月シート、5 月シート、6 月シート）に、自由記述で学習者が記入したものである。内省シートは、前述の観点①～⑥に関する 6 項目¹²の質問からなり、授業中に記入させてその場で回収した。次の「産出データ」は、敬語コミュニケーション観の変容に関わった意識や認識を分析するためのデータである。これは、授業に参加する中で、学習者が書いたり話したりした内容で、記述データ（各授業の終了時に記入した感想カード、授業中に記入したワークシート類、グループ発表後に記入した振り返りシート及びコメントシート）と、音声データ（授業中のグループでの話し合いやペアでの場面練習、グループ発表）の 2 種類からなる。最後の「振り返りデータ」とは、「内省データ」である内省シートを学期末に 3 枚まとめて学習者本人に返却し、1 学期間の自分の変化を学習者が振り返って書いた期末レポート¹³の内容である。

3.3. 分析方法

分析は、「基本的または一般的な質的調査法¹⁴」（S.B. メリアム 2004:16）で行うこととし、上記のデータについて、次の手順で分析した。

3.3.1. 第 1 段階：データの縮約とコーディング

はじめに、2 週目から 14 週目までの授業実践内容に、上記の 3 種類のデータを時間軸に沿って組み入れ、次のようにして、適宜データを縮

約しながら「産出物記録」を作成した。

まず、「内省データ」は、6項目の質問に対する自由記述内容について、ハンナが記述した言葉とそこに含まれる意味を極力落とさぬよう縮約してまとめた。次に、「産出データ」は、記述データについては、記述どおりあるいは記述内容を文章化して載せた。音声データについては、全ての発話を文字化した上で、グループの話し合いはその発話内容を含める形で文章化し、ペアとの場面練習時の会話については、練習して感じたことや出てきた疑問点などの発話部分を中心に取り出し、なされたやりとりがわかる記述を添えた。グループ発表についても、テーマを選んだ理由や発表の感想を取り出して発話内容を含める形で記述し、質疑応答は、やりとりが見えるよう、対話形式のまま載せた。最後の「振り返りデータ」については、記述どおりに載せた。

このように全てのデータを基に「産出物記録」を作成した後、さらに、「産出データ」と「振り返りデータ」については、学習者が「敬語または敬語コミュニケーションに関して、気づいたこと、感じていること、考えていること」という観点から定性的コーディング（佐藤 2008:33）を行った。ここで付したコードについて、2段階目の分析を行った。

3.3.2. 第2段階：変容に関わったと考えられる意識及び認識の分析

第2段階では、第1段階でコーディングをした「産出データ」と「振り返りデータ」について、付されたコードの分析を進めた。方法としては、「産出物記録」同様、2週目から14週目までの授業実践内容に、第1段階で付したコードを時間軸に沿って組み入れ、1つのコードあるいは前後に続く複数のコードの内容から、「読み取れる意識及び認識」をまず解釈し、その内容に基づいて、「意識・認識ラベル¹⁵」を付していた。

以上のような分析を行った上で、4.1.では、縮約した「内省データ」を基に敬語コミュニケーション観の変容を捉える。そして、その間にどのようなことを感じ、考えていたのかを「意識・認識ラベル」の内容から考えていく。4.2.では、本人の振り返りという角度から、「意識・認識ラベル」に従って変容過程を考察する。

4. 敬語コミュニケーション観の変容過程

4.1. 「内省データ」とその間の「産出データ」に基づく分析結果と考察

授業開始直後（2週目）のハンナの4月シートは、以下の内容である。

〔 〕は本人の言葉の引用を、括弧内の①～⑥は観点の番号を表す。）

▶ 4 月シート ◀ (2 週目)

敬語は、使う機会や状況がなく、[若者達には難しい言葉である]というイメージを持っており (①)、敬語の重要な意味は、[言葉に尊敬の心を含めて表現できる]ことと、[やさしい人柄を持つことができる]ことである (②)。目標は、年配の人と礼儀に外れないで話ができることで、[老人に対して敬語を使うのは人と人の間をつなぐ大事なものであると思って]いて、[老人にいろんなことを教えてもらう時]に[尊敬と人に対してのやさしさは持つべき]だと考えている (③)。自信については[一言で自信ない]と感じており、教科書で日本語を学んだ後は友達との会話に慣れ、[敬語と離れてしまった]ために[小学生ぐらいの知識しかない]と思っている (④)。敬語を使った経験も、使う場に行ったこともないため、自分の敬語には満足していないが (⑤)、敬語が使えるようになって、[つきあえる人たちが増える]ことを期待している (⑥)。

ハンナは、日本の若者にとって敬語がどのような存在か、という視点から敬語のイメージを持っており、尊敬の心が表現できることとやさしい人柄を持てることを敬語の重要な機能だと考えている。今は友達との会話に慣れていて敬語を使う環境にもなく、敬語と距離があると感じているが、人とのつきあいの広がり期待していることがわかる。なお、ここで書かれている「つきあえる人」には、目標に書かれている、年配の人が含まれていると推察できる。

その後、5月シートを記入するまでに、ハンナの敬語コミュニケーション観の変容に関わったと考えられる意識及び認識の内容が、次の9つである。(【】は、「意識・認識ラベル」の内容を表し、本文中ではそのラベル番号を()で表す。また、「」は、コードからの引用であることを示す。)

ラベル 1	【年上の人から敬語で話されて感じた、「尊重される」ということ】
ラベル 2	【礼儀正しいと認識されるのに十分な敬語の程度についての疑問】
ラベル 3	【日常の中で慣れていないがために感じる、敬語の難しさ】
ラベル 4-1	【礼儀正しい若者だと思われる敬語の使い方】
ラベル 4-2	【日本人の中でも人によって異なる敬語の使い方】
ラベル 5	【今後経験するかもしれない面接場面での敬語の使い方】
ラベル 6	【覚えるべき敬語の多さと、学ぼうとする意欲】
ラベル 7-1	【自分の使える敬語の少なさと努力の限界】
ラベル 7-2	【敬語を使う練習の必要性】

2週目に行った、敬語に関して印象に残っている経験を話す活動の中で、来日して間もないハンナは、大学事務所の職員から敬語を使われ、自分が年下であるにも関わらず、相手が自分を尊重してくれたと感じた

経験(1)を挙げた。この時点でハンナは、[です・ます体では十分ではないのか]、[どのぐらい勉強したら礼儀正しい若者になるか]、といった周りから認められるために十分な敬語の程度に関心を持っている(2)が、敬語を使う機会がないために、[今敬語はあんまりわからない状態だ]と自覚している(3)。グループの話し合いでも、ラベル2と類似した、「せめて礼儀正しい若者になりたい。その程度がどのくらいかを知りたい。」という意識が見られ(4-1)、関心を持っていることがよくわかる。また、この活動では、グループの他の学習者の話から、日本人の敬語の使い方も人によって異なるようだ聞き、意識に留まっている(4-2)。

3週目には、面接を受けた経験がある学習者を含む3人で、その時の場面を共有し、場レベルや相手レベルなどを改めて考えてみる活動を行ったが、その際ハンナは「間接経験として練習できたクラスメートの経験を次回自分がする時に思い出して生かしたい」という感想を持っている(5)。4週目から6週目では、敬語の体系的な学習や場面練習を通じ、覚えるべき敬語の多さに、[ちょっとへこんでしまった]と書いているが、[でもがんばります!]&書き添えている(6)。その後も、場面練習では自分が使える敬語の少なさや使うタイミングに悩み、練習中に、[無理]という言葉も漏らしていた(7-1)が、感想カードからは[家でぜひ復習します!!]と前向きな姿勢も見られ、敬語を学ぶ難しさと練習の必要性(7-2)を同時に感じ、葛藤している時期だと考えられる。

次に、6週目に記入した5月シートの内容を以下に示す。

▶5月シート◀(6週目)

敬語は[文法的]で[覚えなければならないことがたくさんある]というイメージを持ち(①)、[相手を尊敬する気持ちが含まれる]と考えている(②)。自分の目標は、[お～になる、お～するを自由自在で使えるぐらい]で(③)、自信については、勉強し始めたばかりで、[話す時は全然口に出ない]ため、[話すのはまだまだ]だと感じている(④)。友達と話すのに慣れているため、[先生に話す時にも失敗する]ことを不安に感じているが、敬語ができるかどうかよりも[まず使おうとする気持ちからやり直そう]と考えている(⑤)。期待感としては、自分で[外国人という気持ちがなくなる]ことを考えており、[私の気持ちをもっと繊細にもっと正確に表現できて、日本人と本当のコミュニケーションが成立]することを期待している(⑥)。

敬語のイメージは、ラベル6、7-1、7-2の影響を受けてか、覚えなければならないことの多さと結びついているが、[一言で自信ない]と書いていた4月に比べると、失敗に対する不安はあるものの向き合おうとする気持ちが見られる。また、敬語を使うことによって、より自分の気持

ちの繊細な部分まで正確に表現できると感じ、その表現力を身につけて、日本人との本当のコミュニケーションを期待していることがわかる。

続いて、6月シートを記入するまでの意識及び認識の内容を見ていく。

ラベル 8	【日常で美化語が使われているという気づき】
ラベル 9	【敬語に向き合う姿勢への反省と学習意欲】
ラベル 10-1	【クラスメートの敬語使用の不適切さに対する認識】
ラベル 10-2	【授業で学んだ敬語を発表で生かす姿勢に対する評価】
ラベル 11	【メールにおける礼儀正しい表現の存在への気づき】
ラベル 12	【敬語を使った発表が思い通りにできなかった悔しさ】
ラベル 13	【メールでの敬語表現を甘くみていた自分を恥じる気持ち】
ラベル 14-1	【クラスメートの敬語使用の不適切さに対する認識】
ラベル 14-2	【授業で学んだ敬語を発表で生かす姿勢に対する評価】

美化語を扱った7週目の授業では、日常の中で美化語が使われていることに初めて気づき(8)、7週目と9週目には、前週の場面練習のスク립トを見ながら、よりよい表現について再度考え、あまり敬語が使えていない自分を振り返って、[全然練習にならないかもしれない、この態度だったら。]と反省している。ただし一方で、敬語の表現に慣れてきた感覚も得ており、自分への励ましや学習意欲(9)も見られる。

10週目には、グループ1と2の発表の後に、ハンナのグループ3の発表があった。グループ1と2の発表に対するコメントシートでは、改まった場面での話し言葉の使用について、場面に合わせるべきだとして、[やっぱり→やはり]のような具体的な指摘(10-1)をしたり、習った敬語を使おうとする発表者の姿勢を評価(10-2)したりしていた。グループ3での、親しくない人にメールでお願いする時の敬語の使い方というテーマで行った活動を通しては、「メール上でも礼儀正しい言い方ができる」ことを知り(11)、発表自体については、授業で学んだ敬語がうまく使えなかったことを悔しがっている(12)。また、日本人がメールで「意外にもちゃんとした敬語を使っていて驚きました。メールなどで“甘えてもいいんじゃない?”と思った自分が恥ずかしくなるぐらいでした。」(13)と、恥じる気持ちが見られる。

翌週のグループ4と5の発表に対しては、ラベル10-1、10-2と同様の指摘や評価(14-1、14-2)をしており、この時期は、反省や悔しさを味わいつつも、自分なりに敬語コミュニケーションの場面を捉える基準となる軸ができてきたのだと考えられる。

続く11週目に記入した6月シートは以下の内容である。

▶ 6 月シート ◀ (11 週目)

敬語は自分にとって[頭の中から引き出さなきゃならない言葉]だが、[一度口に出したらすぐ慣れるかも]しれないと感じている (①)。機能としては[相手を尊重している気持ちを伝える]ことと、[自分の人格を見せる]ことで (②)、目標は、[緊張しないで、自然に口から出せるようになりたい]ということである。[まだ自信はない]が、[以前に比べたら断然使うようになったのでうれしい]とも感じ、[もっと練習して“敬語使えるんです！”って言いたい]と願望を抱いている (③)。今は[自信がなくて緊張する]ことを不安に感じていて (④)、まだ満足はしていない状態であるが、[実際の場]で敬語に慣れていき、[今から始めるところだ]という気持ちでいる (⑤)。今後、[もっと日本人とコミュニケーションができて、友達もたくさん作れる]ようになることと、[母国に戻って自分の日本語の実力を自慢できる]ようになることを期待している (⑥)。

敬語のイメージには、場面練習で痛感したことが含まれているが、手ごたえも感じながら、緊張を克服したい気持ちも表れている。また、アルバイトの面接や授業の発表の中で、以前より敬語を使えるようになったことを喜んでおり、学習意欲も見られる。緊張するためまだ満足はしていないが、実際に敬語を使いながら慣れていきたいと考えている。さらに、期待の内容から、敬語ができることは周囲からの高い評価につながるという認識を持っていることもわかる。

次は、12 週目¹⁶に見られた 3 つの意識及び認識の内容である。

ラベル 15	【面識のない人に敬語を使われないことで感じる不快感】
ラベル 16-1	【外国人が敬語を学ぶことの必要性】
ラベル 16-2	【日本人が外国人にも敬語を使うことの当然性】

12 週目のディスカッションでは、外国人であるということ自分で自分が尊重されなかったら不快感を感じるだろう (15) と述べていることから、外国人も対等に敬語を使い、使われるべきだ (16-1、16-2) という考えがあることがわかる

4.2. 「振り返りデータ」に基づく分析結果と考察

期末レポートからは、以下の 8 つの意識及び認識が見られた。

ラベル 17-1	【敬語は必要で大事なものだという気づき】
ラベル 17-2	【敬語は時間をかけて身につけるべきものだという考え】
ラベル 17-3	【敬語は難しいという、変わらぬ考え】

ラベル 17-4	【敬語体系の整理による、漠然とした難しさから練習への意欲への変化】
ラベル 17-5	【敬語に対するわがままな「敵対心」から、もっと上手に話したいという「向き合う意欲」への変化】
ラベル 17-6	【敬語のすばらしい面に対する気づき】
ラベル 17-7	【難しくても苦しくても使いたいという気持ちへの変化】
ラベル 17-8	【周囲から認められた実感と今後への期待】

ハンナは、敬語が意外にも大事で、[そんなものやらない]と感じていた思いから、来日後、[必要]で[大事]なものだと感じるようになった(17-1)のために、受講を決めたという経緯からレポートを書き始めた。受講後の今も敬語は難しいと感じている(17-3)が、時間をかけないと身につけられないものだと考える(17-2)ようになり、自分の変化として、練習への意欲(17-4)や敬語に向き合う意欲(17-5)、すばらしい面に対する気づき(17-6)が生じ、[頭を一生懸命に転がって脳の底から出さなきゃすぐに口に出ないけど、それでもそんな面倒な過程を通じて]でも話そうとすること自体が[大きな変化だ]と述べている(17-7)。さらに、周囲の人に褒められたことで喜びを感じ(17-8)、[これからもっと練習して、こんな嬉しい出来事にたくさん出会いたい]という、今後も継続して敬語コミュニケーションと向き合おうとする意識が見られる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、1学期間のハンナの敬語コミュニケーション観の変容過程を分析し、考察した。学期末の時点でも、ハンナは敬語の使い方に十分には自信が持てず、完全に満足はしていない。しかし、[今から始めるところだ](6月シート)というハンナの言葉どおり、受講後も自身の目指す敬語コミュニケーションを自律的に追求していこうという姿勢が見られる。

1人の事例からではあるが、授業実践で学習者の敬語コミュニケーション観の意識化を促したことが、様々な角度からの揺さぶりや問い直しとなり、それらが反省、迷い、気づき、悔しさ、恥じる気持ち、期待などを学習者に持たせ、自身の敬語コミュニケーション観を認識させるのに有意義に機能した可能性が示せたと考える。

今回は、事例を詳細に追究するために1人の学習者の分析結果を重視したが、今後は、学習者の学び合いも含め、学習者に起きている変容を多面的に分析することに加え、個別性だけでなく複数の学習者に見られる共通性から、授業実践の内容が与える影響についても考察し、改善点を反映させた授業実践を重ねていきたい。

【注】

- 1 本稿では、「いらっしゃる」など語レベルの敬語を「狭義の敬語」とし、これに改まりを表す表現（「さっき」に対して「さきほど」など）を加えたものを「（広義の）敬語」とする。また、これを具体的な人間関係や場と共に考えて用いた表現を「敬語表現」とする。
- 2 敬語コミュニケーション観の意識化を促した理由は、学習者が自覚的に認識できれば、本人が目指す敬語コミュニケーションのイメージを明確に持つことができ、モニタリングが働くことで、実現したいコミュニケーションに近づくことができると考えたためである。
- 3 当該機関で設けられている8段階の学習レベル（1・2 初級、3～5 中級、6～8 上級）のうちの6レベルのクラス。
- 4 敬語が持っている敬語としての性質。例えば、「おっしゃる」という敬語は、「言う」（という意味）に、「その〈言う〉という動作の主体を高くする」（という性質）が加わったものだと考えると、「動作の主体を高くする」というところが、敬語的性質にあたる。（蒲谷他 2009:16）
- 5 「敬語使用場面～自然さを求めた作例集」を活用 2009年4月24日
（<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/mic-j/keigo/index.html>）
- 6 具体的な場面の中で、まず「人間関係」について、発話者Aにとっての発話者Bの相手レベル、発話者Bにとっての発話者Aの相手レベル、次に「場」について、発話者Aにとっての場レベル、発話者Bにとっての場レベルがそれぞれの程度か考える。ペアでお互いの認識を理解し合った上で、会話の練習を行う。場面を自分なりに捉えることに十分な時間をかけ、お互い自分の認識の理由を説明することで意識化をねらったものである。相手レベルと場レベルは蒲谷他（1998）にある「相手や場の位置づけにおける認識の5段階」（+2・+1・0・-1・-2）を用いながら、幅を持つという前提の下で活用した。
- 7 4・5週目の場面練習の際、学習者の多くが会話を作って書くことに意識が向き、口頭練習が十分でなかったことから、6週目に録音を取り入れた。7週目に文字化したスクリプトを使用して復習したところ有効だと感じたため、8週目も録音しながら練習した。
- 8 テーマ：日本人同士であれば敬語を使う場面で、日本人が自分に対して（外国人であると感じて）敬語を使いませんでした。皆さんはどう感じますか。
- 9 15週目は教育機関全体での授業時間調整のために課題を課す形式で行ったため、メールでの課題提出とし、教室での授業は14週目までとなった。
- 10 欠席回数が1回のみでデータが豊富であるため、分析の対象者とした。
- 11 2週目、6週目、11週目の3回であるが、実際は3週目と4週目の間に祝日で休講日があったため、時間的には4週おきである。
- 12 ①今、あなたが持っている敬語のイメージを自由に書いてください。（キーワードでもいい）②敬語を使うことは、どんな意味や役割、機能があると思いますか。③あなたは、どのくらい敬語が使えるようになりたいと思っていますか。④今、あなたは、敬語を使ったコミュニケーションにどのくらい自信がありますか。自信がない人は、どのようなことが不安ですか。⑤今、あなたは、自分の敬語を使ったコミュニケーションに、どのくらい満足していますか。満足していない人は、どのような点に満足していません

んか。⑥あなたは、自分が自信を持って、満足できる敬語コミュニケーションができるようになったら、何がかわると思いますか。どんな変化があることを期待しますか。

- 13 A4 用紙（1200 字）で 1 ～ 2 枚の量である。
- 14 理論の構築や、1 つのユニット及び境界づけられたシステムへの集約的なケース・スタディではなく、ある現象やプロセス、対象者の観点や世界観を記述と分析の中から発見・理解しようとするもの。（pp. 16-17）
- 15 「意識・認識ラベル」は、第 1 段階で付したコードから、「読み取れる意識・認識」を解釈し、その内容を基に付したものであるが、その際、1 つの「読み取れる意識・認識」から複数の「意識・認識ラベル」が生成された場合には、ラベル番号に枝番号がつく形となっている。（例：ラベル 4-1 とラベル 4-2）
- 16 13 週目のデータの内容には、本研究のコーディングの観点に該当する内容がなかったためコードが付されなかった。そのため、考察は 12 週目の実践内容から行った。

【参考文献】

- 蒲谷宏（2003）「『待遇コミュニケーション』の研究と教育」『待遇コミュニケーション研究』創刊号 pp. 1-6 待遇コミュニケーション研究会
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子（2006）『敬語表現教育の方法』大修館書店
- 蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店
- 蒲谷宏・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子（2010）『敬語コミュニケーション』朝倉書店
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- 津村奈央（2008）「敬語に対する学習者の意識の変化－学習者は「敬語コミュニケーション 3」クラスから何を学んだのか－」『実践研究フォーラム予稿集』日本語教育学会 2008 年研究集会 pp. 35-38
- 徳間晴美（2009）「待遇コミュニケーション観の形成に関する考察」『日語日文学研究』第 69 輯 pp. 47-61
- 文化審議会（2007）「敬語の指針」（平成 19 年 2 月 2 日 文化審議会答申 http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo_tousin.pdf）
- S. B. メリアム（2004）『質的調査法入門－教育における調査法とケース・スタディ－』（堀薫夫、久保真人、成島美弥訳）ミネルヴァ書房

ーとくま はるみ 早稲田大学日本語教育研究センター・助手ー